

私 の 心 に 残 つ た 本



## 光と影

衛生学部教授  
(理学療法治療学)

岡西 哲夫

渡辺淳一の「光と影」は、昭和45年の直木賞受賞(63回)作品です。本の題名がとにかく印象的でした。パラパラと紙を繰っていた時に、確かに腕の手術、それも切断の場面が目に留まり、それが真に迫って書かれていましたから思わず手にした、いわば偶然に買った本でした。しかし、今から思えば運命的であり、まさに心に残る本となりました。その頃の私は、本といえば医学書は持っていましたが、好んで本を読む方ではありませんでした。東京都清瀬市の国立療養所付属リハビリテーション学院を卒業して、すぐに函館市にある社会福祉法人の病院に勤務してまもなくの頃でした。真新しい帯のついた新刊を買ったのは確かこの本が始めてだったと思います。

この本を契機として、渡辺淳一の作品(初期の頃)を、次から次とむさぼるように読みました。北海道の冬を象徴する雪の白さを背景にして、医学と人間が織りなす人生のはかなさを描いた作品の数々は、とても文学的でロマンに満ちていました。しかも医学的にも、手術の場面とか、疾患や症状の説明の行は、真に迫って面白く、医学・医療とは何かを、真実をもって衝撃的に、そして魅力的な姿として教えてくれたからです。その中で、特にこの本は、それまでの不安定な自分の方向性を、医療の世界、そしてリハビリテーションと理学療法の世界に確かに向かわせてくれたように思います。この本だけは、帯はすぐになくなりましたが、ずっと今でも持ち続けています。

「貴方のカルテが寺内さんのカルテの上に置いてあったのです。」…(あの時、すでに勝負は決まっていたのだ)…(なんと愚かな...)突然、小武は笑い出した。眼は狂気のように宙を見詰めている。…この行は、特に衝撃的ですし、この作品のクライマックスだと思います。

内容を要約しますと、西南戦争で全く同じような負傷(貫通銃創による右上腕肘関節上部粉碎骨折)を負った二人(寺内正毅と小武敬介)が、カルテが小武、寺内の順に重ねられたという偶然がその後の二人の運命を決するのです。それも執刀医である佐藤軍医自身にもわからない、ふとした実験的な出来心からです。麻酔から目覚め、明るい朝の陽が輝く下で、激しい痛

「光と影」

渡辺淳一 著

(文藝春秋社)

みが走った右腕を探ったとき、肩から少し下のところで跡切れていたことに怯えた小武は、横のベッドに寝ている寺内の右手が確かにあることに気づいて息を呑みます。そこから二人の人生は大きく光と影の方向に分かれていきます。右腕を失った小武は、予備役に編入された後、陸軍の親睦組織「偕行社」に入り、のちには事務長を務めますが、そこまでの人生でした。一方、神経も骨もないが、形だけでも右腕の残った寺内は、その後数年は入院生活を余儀なくされますが、陸軍に復帰してからはトントン拍子に出世して、ついには陸軍大臣を経て内閣総理大臣にまで上りつめるのです。東京教導団時代は寺内よりはるかに優秀だった小武は、どうしても昔の夢が忘れられず、我が身の不運を呪い続け、ついには発狂してしまいます。光輝く表の人生を歩いた寺内に対して、影としての裏側の人生を歩かなければならなかった小武。目には見えない運命によって、もはや逃げられなくなっていく人間の一生が、現実的な怯えとなって追ってきたことを今でも覚えています。

運命の偶然的作為の恐ろしさを味わいながら、小武が切断した方の肩の運動をしていたことや、寺内が良肢位固定装具でマッチを上手に擦る場面、そして明治時代、義足があるのに

義手が作られなかった

のは、足と手の機能

の違いからであった

ことなど、臨床的

にしかも興味深く

解説してくれた本

でもありました。

医療人をめざす

若い学生に、是非

読んでもらいたいと、毎

年、授業で

眠りかけた

学生を起こ

すための、

きっかけにしている本

です。



(当館文春文庫版を所蔵 分類番号913)